

いくさやぶれにければ、熊谷次郎直実、「平家の君達たすけ舟に乗らんと、汀の方へぞおち給ふらむ。あっぱれ、よからう大將軍に組まばや」とて、磯の方へ歩まするところに、練貫ねりぬきに鶴縫ひたれうたる直垂ひたれに、萌黄句もぎの鎧よろい着て、鍬形くわがたうたる甲かぶとの緒いとしめ、黄金こがねづくりの太刀はを佩はき、切斑きりふの矢や負しげどひ、滋藤しげとうの弓ゆみもって、連銭れんぜん葦毛あしげなる馬うまに黄覆輪きんぶくりんの鞍くらおいて乗のりたる武者ぶし一騎いっし、沖おきなる舟ふねに目をかけて、海へざとうちいれ、五六段ばかり泳がせたるを、熊谷、「あはれ大將軍とこそ見参らせ候へ。まさなうも敵にうしろを見せさせ給ふものかな。かへさせ給へ」と扇をあげてまねきければ、招かれてとってかへす。汀にうち上がらんとするところに、おしならべてむずと組んでどうど落ち、とって押さへて頸をかかんと甲かぶとをおしあふのけて見ければ、年十六、七ばかりなるが、薄化粧して、かね黒なり。わが子の小次郎が齡ほどにて、容顔まことに美麗なりければ、いづくに刀を立つべしとおぼえず。「そもそもいかなる人にてましまし候ふぞ。名のらせ給へ。たすけ参らせん」と申せば、「汝は誰そ」と問ひ給ふ。「物その者で候はねども、武蔵国住人、熊谷次郎直実」と名のり申す。「さては、汝にあうては名のるまじいぞ。汝がためにはよい敵かたきぞ。名のらずとも頸をとって人に問へ。見知らうずるぞ」とぞのたまひける。熊谷、「あっぱれ、大將軍や。この人一人討ち奉ったりとも、負くべきいくさに勝つべきやうもなし。また討ち奉らずとも、勝つべきいくさに負くる事もよもあらじ。小次郎がうす手負うたるをだに、直実は心苦しうこそ思ふに、この殿の父、討たれぬと聞いて、いかばかりか嘆き給はんずらん。あはれたすけ奉らばや」と思ひて、うしろをきつと見ければ、土肥、梶原五十騎ばかりでつづいたり。熊谷涙をおさへて申しけるは、「たすけ参らせんとは存じ候へども、みかたの軍兵雲霞のごとく候ふ。よものがれさせ給はじ。人手にかけ参らせんより、同じくは直実が手にかけ参らせて、後の御孝養をこそ仕り候はめ」と申しければ、「たどくとくとく頸をとれ」とぞのたまひける。

平家は戦さに敗れた。熊谷次郎直実は「平家の君達がたすけ舟に乗ろうと、水際の方に逃げるだろう。ああ、身分の高い大將軍と一対一で組み合いたい」と言って、磯の方へ馬を進めているところに、練貫に鶴の刺繍をした直垂に、萌黄句の鎧を着て、鍬形うたる甲の緒を締め、黄金づくりの太刀を腰に差し、切斑の矢を負い、滋藤の弓を持って、連銭葦毛の馬に黄覆輪の鞍おいて乗っている武者が一騎、沖にいる舟を目がけて、海にざと馬を乗り入れ、岸から六十メートルぐらい馬を泳がせているので、熊谷は「おお、大將軍とお見受けした。卑怯にも敵にうしろをお見せになるか。お戻りください」と扇をあげてまねいたところ、その武者は招かれて戻ってくる。水際に上がろうとするところで、馬を並べてむずと組んでどつと共に落ち、取って押さえて頸を斬ろうと甲かぶとを押し上げて見ると、十六、七歳ぐらいの若者が、薄化粧して、お齒黒をつけている。わが子の小次郎と同じ年ごろで、顔かたちがとても美しかったので、どこに刀を突き立てればいいのかわらない。「そもそもどなたでいらっしゃいますか。お名前を聞かせてください。お助けしましょう」と言うと、「おまえは誰か」とお尋ねになる。「名のるほどの者ではございませんが、武蔵国住人、熊谷次郎直実」と名のった。「では、おまえには名のるまい。おまえのためにはよい敵かたきぞ。名のらぬが頸をとって人に尋ねよ。わたしを知るものもいるだろう」とおっしゃった。熊谷は、「ああ、大將軍だ。この人一人をたとえ討ち取ったとしても、負けるはずの戦さに勝てるはずもない。たとえ討ち取らなくても、勝つはずの戦さに負けることはよもやあるまい。息子の小次郎がちょっとしたけがをしても、おれは胸が苦しくなったのだ、この殿の父は、息子が討たれたと聞いて、どれほどお嘆きになるだろうか。なんとかしてお助けしたい」と思って、うしろをさつと見たところ、土肥、梶原が五十騎ぐらいでつづいてくる。熊谷は涙をおさえて、「お助けしたいとは思いますが、味方の軍勢が雲霞のごとく群がっています。もう逃れるすべはないでしょう。他人に斬らせるよりも、同じことならわが手で斬って、後のご供養をいたしましょう」と言ったところ、「さあ早く頸を斬れ」とおっしゃった。

熊谷あまりにいとほしくて、いづくに刀をたつべしともおぼえず、目もくれ心もきえはてて、前後不覚におぼえけれども、さてしもあるべき事ならねば、泣く泣く頸をぞかいてんげる。「あはれ、弓矢とる身ほど口惜しかりけるものはなし。武芸の家に生れずは、何とてかかるうき目をばみるべき。なさけなうも討ち奉るものかな」とかきどき、袖を顔におしあててさめざめとぞ泣きゐたる。やや久しうあって、さてもあるべきならねば、鎧直垂をとって頸をつつまんとしけるに、錦の袋に入れたる笛をぞ腰にさせられたる。「あないとほし、この暁、城じょうのうちにて管絃し給ひつるは、この人々にておはしけり。当時みかたに東国の勢何万騎かあるらめども、いくさの陣へ笛もつ人はよもあらじ。上臈は猶もやさしかりけり」とて、九郎御曹司の見参に入れたりければ、これを見る人涙をながさずといふ事なし。

後に聞けば、修理大夫経盛の子息に大夫敦盛とて、生年十七にぞなられける。それよりしてこそ熊谷が発心の思ひはすすみけれ。件の笛はおほち忠盛笛の上手にて、鳥羽院より賜はられたりけるとぞきこえし。経盛相伝えられたりしを、敦盛器量たるによって、もたれたりけるとかや。名をば小枝さえだとぞ申しける。狂言綺語きょうげんきぎよの理といひながら、遂に讚仏乘さんぶつじょうの因いんとなるこそあはれなれ。

熊谷はあまりに気の毒でどこに刀を立てればいいのかかわらない、目の前が暗くなりなにも考えられなくなってしまい、前後不覚におちいったが、いつまでもそうしているわけにもいかないので、泣く泣く頸を斬ったのだった。「ああ、弓矢をとる身ほど情けないものはない。武芸の家に生れていなければ、このようなつらい目にあわずにすんだのに。おれは非情にも討ち取ってしまった」と泣き言をいい、袖を顔に押し当ててさめざめと泣いていた。しばらくして、そうもしてられないので、鎧直垂をとって頸を包もうとすると、錦の袋に入れている笛を腰に差していた。「ああ、気の毒なことだ、今日の明け方、城郭の中で演奏しておられたのは、この方々だったのだ。今、味方に東国の軍勢が何万騎いようが、戦さの陣へ笛を持つてくる人はまさかないだろう。貴族の子息は優美だなあ」と思って、義経にお見せしたところ、これを見る人で涙を流さない人はいなかった。

あとで聞くと、修理大夫経盛の子息、大夫敦盛とて、十七歳であった。このことがあって熊谷の発心の思ひは強くなった。くだんの笛は、祖父の忠盛が笛の名手で、鳥羽院から拝領したと伝えられている。経盛が相伝なされたものを、敦盛が笛の名手だったので、所持していたという。笛の名をさえだ小枝と叫ぶ。狂言綺語、うわべだけを飾って誠がないといわれる遊びに用いる笛ではあるが、熊谷直実を仏の教えに導いたのは貴いことである。